



TITLE:

# フィンランド語における節の統語構造について: 移動現象を中心に

AUTHOR(S):

岸田, 泰浩

---

CITATION:

岸田, 泰浩. フィンランド語における節の統語構造について: 移動現象を中心に. 言語学研究 1988, 7: 37-72

ISSUE DATE:

1988-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87940>

RIGHT:

# フィンランド語における節の統語構造について —移動現象を中心に—

岸田泰浩

## 1. はじめに

本稿は、Chomsky(1981, 1982, 1986a, 1986b, 1987<sup>1)</sup>)他のいわゆる統率・束縛 (GB) 理論の枠組みによる、フィンランド語における節の統語構造の一分析案を提示するものである。

Chomsky(1981)でその基盤を確立したGB理論は、同(1986b)における障壁(barrier)の導入で新たな展開を見せたが、その根底にある基本的態度は、「原則と媒介変項(principles and parameters)によるアプローチ」である。すなわち、言語現象は、普遍文法(UG)を構築する、モジュール的な関係を成す下位理論の諸原理が相互作用することによる結果として説明されるのである。

本稿は、現在のGB理論によれば、フィンランド語の節が、VとIが1つの範疇として生成され、さらに、主語がVPへの付加要素である統語構造を有するということを提唱する。

## 2. フィンランド語の節の階層性(configurationality)

### 2.1. Xバー理論

普遍文法を成す諸原理は、完全解釈の原則(Full Interpretation)を満たす認可(license)の原理として機能している。Xバー理論も、句構造に課された認可原理の1つとして、D構造とS構造とにそれぞれ独立して適用される。

(1)  $X^j = \dots X^i \dots$  ( $0 \leq i \leq j \leq 2$ ; ただし、 $X^i$ は左端か右端)<sup>2)</sup> [Chomsky(1987)]  
(1)によって、D構造においても、同一投射レベルの反復、すなわち付加(adjunction)構造が生成されることになる。さらに、Chomsky(1986b)で採用されたように、語彙範疇(V, N, A, P)だけではなく、非語彙範疇(C[omp], I[nf1])にも適用され、英語の節は、従って、(2)の構造を成す。

(2) [<sub>CP</sub>... [<sub>C</sub>·C [<sub>IP</sub>NP [<sub>I</sub>·I VP]]]]

統語構造に現れる要素間の順序は、各言語において格標示・ $\theta$ 標示の方向などの媒介変項を設定することにより決定されるため、Xバー理論内や、かつての範疇部門(句構造規則)を別に設けて、規定する必要はない。

### 2.2. 階層性

階層構造を成す(2)は、英語などの固定的な語順を持つ言語を記述するには、適しているけれども、世界の諸言語には、自由な語順を持つものも多く、それらの言語に対しては、異なった構造を付与しなければならない可能性がでてくるのは当然

である(cf. Whitman(1987))。

フィンランド語は、以下の例が示すように、語順が割合に自由である。(下線部は、強調アクセントを表す。)

(3) a. Esa luki kirjan.      c. Kirjan Esa luki.      e. Luki Esa kirjan.  
Esa read book-A<sup>3)</sup>

b. Esa kirjan luki.      d. Kirjan luki Esa.      f. ?Luki kirjan Esa.  
しかし、語順が意味を変えないわけではない。次の英語の訳が、上記例文の意味をよく伝えている(Karttunen & Kay(1985) ; (3f)については、§4.2.2.1.参照)。

(3') a. "Esa read a book."  
b. "It was ESA who read the book; By ESA the book was read."  
c. "It was a BOOK that Esa read; The BOOK Esa read."  
d. "The book was read by Esa."  
e. "Esa DID read a book."

従って、(3a)のSVOが基本的語順であると思われるが、このような自由な語順を持つフィンランド語が非階層的言語であるかどうか、つまり、主語を除外し、目的語を含むVPという範疇を持たないのかどうかを検討してみよう。

範疇VPの有無を確かめるために、①「動詞+目的語」が1つの構成素を形成しているか否かを、構成素に働きかける統語現象をもとに調べる方法と、②理論内の原理をもとにVPの存在を推測する方法を利用する。結論からいえば、決定的ではないけれども、これらは、フィンランド語が階層的言語であることを示唆する。<sup>4)</sup>

## 2.2.1. 構成素という観点からの観察

### 2.2.1.1. VP削除

(4) Jotkut osaavat pukea ajatuksensa sanoiksi, jotkut eivät Ø.  
Some can disguise idea-their words-TRAN some NEG

「自分の考えを言葉に変えることができる者もいれば、できない者もいる。」

(4)で欠けているのがVPであるかどうかは、否定動詞がいかに分析されるかにかかっているが、<sup>5)</sup>削除(／省略)された語連続"osaa- pukea ajatuksensa sanoiksi"が、何らかの構成素を成していることは、確かである。

### 2.2.1.2. VP置換

(5) a. Liitän matkalaskuun      myös bussiliput, ja niin tekevät  
join-1S travelling=bill-ILL also bus=tickets and so do-3P  
muutkin komitean jäsenet.<sup>6)</sup>  
other-too committee-G members-N

「私は、バスの切符も旅行費に加えるが、他の委員もそうする。」

- b. Kokouksessa hän puhuu paljon, mutta niin kotonakin.  
 meeting-INE he speaks much but so at=home-too

「集会で、彼はよく話すが、家でもそうだ。」

上の例文(5a)の下線部は英語のVP代用表現“do so”に相当するが、(5b)にみるように類似の表現がVP以外にも使用されるために、Hakulinen & Karlsson(1979:225)は、“(teke-) niin —=kin”という表現は、文を“theme-rheme”という情報構造的な観点から分析した際のrhemeを代用する表現ではないかと述べている。従って、VP範疇判定基準としては英語の対応表現ほど決定的とは言えない。

### 2.2.1.3. VP移動

- (6) \*Pekka lupasi voittaa ensi pelin, ja voittaa ensi pelin  
 Pekka promised to=win next game-A and to=win next game-A  
 hän teki.  
 he did

「ペッカは、次の試合に勝つと約束して、実際に試合に勝った。」

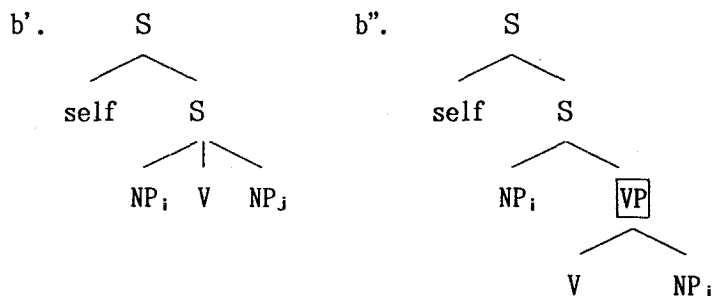
VP移動に関しては、フィンランド語にそのような現象が見あたらないだけであり、これは、VP範疇に対する否定的証拠ではないであろう。

### 2.2.2. 理論内の原理等による観察

#### 2.2.2.1. 束縛理論

束縛理論の条件の一部として、「照応表現(anaphor)は、c統御する先行詞により束縛される」という制約がある。下の2例は、再帰表現“itseään”の束縛者(binder)の可能性を示したものであるが、両者はその可能性が異なる。

- (7) a. Juontaja<sub>i</sub> vaati laulajaa<sub>j</sub> säestämään itseään<sub>i</sub>.  
 M.C. demanded singer-P accompany-ILL self-P  
 b. Itseään<sub>i</sub> juontaja<sub>j</sub> vaati laulajaa<sub>j</sub> säestämään.  
 「司会者は、自分自身の伴奏をするよう、歌手に要請した。」



(7a)では、束縛者として主語と目的語の両方が可能であるが、itseäänが前置された(7b)では、主語のみが束縛者となり得る。これは、(7b)に対して、次の(7b')ではなく、(7b")の統語構造を付与することによって、束縛理論で説明が可能である。

つまり、(7')は、主語と目的語を $\alpha$ 統御に関して区別しないのに対し、(7'')では、VPの存在が主語と目的語に異なった統語的位置付けを与えている。

#### 2.2.2.2. PROの分布

GB理論では、一般にPROの特性の1つとして、それが統率されない位置にのみ生起可能であるという定理を採用している。英語において、PROが主語としてのみ現れるのは、目的語の位置が動詞によって常に統率されるのに対し、主語の位置は、統率者Iがその素性によっては統率しない場合（すなわち、[-Agr(eement)]の素性を持つ場合）があるためである。主語も目的語も同じ動詞によって統率される構造では、その非対称性が説明されない。フィンランド語も、次のPROを含む2つの文が対立することから見て、同様の説明が採用される可能性がある。

- (8) a. Hän mietti, ketä PRO totella.    b. \*Hän mietti, kuka totella PRO.  
he wondered who-P    to=obey    who-N to=obey  
「彼は、誰に従うべきかと考えた。」    「彼は、誰が従うべきかと考えた。」

#### 2.2.2.3. [that t]効果

これは、ECPが関与する問題であり、主語のみに、いわゆる[that t]効果が現れるのは、(8)と同じく、目的語と統率者が異なるからだとする見解がある。

- (9) a. \*Kuka, luulet, että t<sub>i</sub> kirjoitti tämän kirjan?  
who-N think-2S that wrote this-A book-A  
「君は、誰がこの本を書いたと思うのか。」  
b. [Kumman kirjan]; luulet, että Pekka kirjoitti t<sub>i</sub>?  
which-A book-A think-2S that Pekka wrote  
「君は、ペッカがどの本を書いたと思うのか。」

暫定的ではあるが、以上の観察からフィンランド語にも主語を除外するVP節点の存在を認める。また、現段階では、フィンランド語の節構造は、英語同様に(2)であるとし、自由な語順は、付加移動(cf. §4.2.2.)の結果であると仮定する。

### 3. 理論的概念

本章では、Chomsky(1987)を中心に、以後の分析の基礎となる概念を提示する。

#### 3.1. 移動の理論と「障壁」

##### 3.1.1. 統率とECP

移動については、「代入(substitution)」と「付加」の2つが認められている。(10)は、移動に課される制約の1つである(Chomsky(1986b):4)。

(10)最大および最小投射範疇のみがMove- $\alpha$ に対して可視的(visible)である。

移動の対象となる要素やその移動先とも、他の原理との相互作用により特定のものに限定されるので、そのための独立した原理・条件などを仮定する必要はない。

付加に関しては、項でない最大投射範疇に対してのみ可能であり、この条件は、項に付加された場合、 $\theta$  役割が「見えなく」なり、 $\theta$  規準に違反が生じるとすることで導かれる。また、付加構造においては、次の3種の関係概念が存在する。

(11) ...  $\delta$  ... [ $\gamma$   $\beta$  [ $\gamma$  ...  $t$  ...]]...

a.  $\gamma$  は  $t$  を「包含する(include)」

b.  $\gamma$  は  $\delta$  を「排斥する(exclude)」

c.  $\gamma$  は  $\beta$  を「被覆する(cover)」

Chomsky(1986b)で導入された「障壁」は、統率理論と境界理論を統一的に扱おうとするための概念である。そこで提案された障壁の定義は、同(1987)においてより統一的な形で修正されている。以下では、概ね後者の定義に従う。

まず、「統率」および関連する概念の定義を示すと以下ようになる。

#### **統率**

(12) 次の場合  $\alpha$  は  $\beta$  を統率する： (i)  $\alpha$  が  $\beta$  を  $c$  統御し、(ii)  $\alpha$  を排斥するような、 $\beta$  にとっての障壁が存在しない。

(13) 次の場合  $\alpha$  は  $\beta$  を  $c$  統御する： (i)  $\alpha$  が  $\beta$  を包含することなく、(ii)  $\alpha$  を排斥しない全ての  $\gamma$  に関して、 $\gamma$  が  $\beta$  を包含（または被覆）している。

(13)の  $\gamma$  として最大投射のみを対象とした時、 $\alpha$  は  $\beta$  を「m統御する」という。

#### **ECP**

(14) 連鎖のリンクは、a統率（先行詞による統率）を満たさなければならない。ある要素が  $a$  統率される時、その要素は「 $\gamma$  マーク」される。つまり、連鎖内の痕跡は、すべて  $\gamma$  マークされていなければならない。

ECPは、以前、「空範疇原理(Empty Category Principle)」なる名称で、痕跡の適正統率条件として述べられたものであるが、今では、連鎖のリンク専用に課された認可原理として再解釈されている。「空範疇原理」は、2つの異なる適正統率の可能性を有していたが、そのような離接的条件を持つ原理は、概念的に欠陥がある。そこで、その2つの条件を別の原理として连接的(conjunctive)に捉え直したその1つが(14)のECP、そして、もう1つが次のL統率条件である。<sup>7)</sup>

#### **L統率**

(15) 痕跡は、L統率（語彙的要素による統率）されなければならない。

例えば、I が主語を統率するということから理解されるように、ある主要部の統率領域は、その投射内全体に及ぶはずである。従って、Rizzi(1987)に倣い、L統率にはm統御が、一方、 $a$ 統率には $c$ 統御が関与すると考えられる。<sup>8)</sup>

ECPやL統率の基盤となる「統率」は、(12)の定義に見られるように、「障壁」をその重要な基盤とする。では、障壁は、どのようにして決定されるのであろうか。

### 3.1.2. 障壁

Chomsky(1986b)よりも以前は、一般に最大範疇がどの要素にとっても統率に対する“障壁”であると考えられていたが、現在の障壁は、相対的に定義される。たとえば、最大投射であっても、ある要素にとっては障壁とならない場合もあれば、非最大投射であっても、障壁となる場合があるのである。障壁には、「固有(inherent)障壁」と最小条件(Minimal Condition)による「最小障壁」の2種がある。

#### 固有障壁

(16) ...  $\alpha$  ... [ $\gamma$  ...  $\beta$  ...]

次の場合 $\gamma$ は $\beta$ にとって固有障壁となる： $\gamma$ がHマークまたはLマークされていない。

(17) 次の場合 $\alpha$ は $\gamma$ をHマークする： $\gamma$ が $\alpha$ の補部である。

(18) 次の場合 $\alpha$ は $\gamma$ をLマークする：(i)  $\alpha$ が語彙的で、(ii)  $\gamma$ が、 $\alpha$ によってHマークされている $\delta$ の直接構成要素である。

#### 最小条件による最小障壁

最小条件は、「より近い統率者と最大投射を越えての統率は成立しない」ことを捉えようとしたものである。

(19) ... [ $\alpha$  ...  $\delta$  [ $\gamma$  ...  $\beta$  ...]

次の場合 $\alpha$ は $\beta$ の障壁となる：最大投射である $\gamma$ と $X^0$ 要素である $\delta$ が存在し、 $\alpha$ が $\gamma$ と $\delta$ を包含し、 $\beta$ が $\gamma$ および $\delta$ の補部に包含されている。

上記定義中の「包含」は、非真包含(improper inclusion)を意味し、例えば、 $\alpha$ が $\gamma$ と同一であっても構わない。

最小条件は、Chomsky(1986b)では統率理論にのみ関係する障壁を形成するとされていたが、同(1987)では、境界理論にも適用されている。境界理論で重要な概念は、「下接(subjacency)」であり、障壁の数により下接の度合が決定される。

(20)  $\varepsilon$  [ $\alpha$  ... [ $\gamma_1$  ... [ $\gamma_2$  ... [ $\beta$  ...]]]]

次の場合 $\beta$ は $\varepsilon$ にとって下接度 $n$ である： $\varepsilon$ を $c$ 統御するような、 $\beta$ に $n$ 個の障壁がある。

下接度1までが、文法的な文の派生を認可し、下接度が2以上になるとそれに比例して文法性が低下する。下接の条件における最小条件は、次のように定義される。

(21) 次の場合 [ $\alpha$ ,  $\gamma$ ]は $\beta$ の障壁となる：最大投射である $\gamma$ と $X^0$ 要素である $\delta$ が存在し、 $\alpha$ が $\gamma$ と $\delta$ を包含し、 $\beta$ が $\gamma$ および $\delta$ の補部に包含されている。

[ $\alpha$ ,  $\gamma$ ]は、異なった $\gamma$  ((20)の $\langle \alpha, \gamma^1, \gamma^2 \rangle$ )の選択によってできる障壁を表す。これは、(19)の $\alpha$ と等価である。

(22) [ $\alpha$ ,  $\gamma$ ]が $\beta$ とRの関係(包含・排斥・被覆・ $c$ 統御...)にあるのは、 $\alpha$ が $\beta$ とRの関係にある時、そしてその時のみである。

注意すべきことは、ECPと下接の条件との間に表面的に見られる矛盾である。

ECPが、連鎖のリンク間、つまり、移動元と移動先との間に障壁が1つもあってはならないことを述べているのに反して、下接の条件は、障壁を1つなら越えることは許している。しかし、この「矛盾」は矛盾ではない。なぜならば、両者の適用時期が異なるからである。ECPは、表示のレベルに課された認可原理であり、一方、下接の条件は、移動の際における条件である。障壁を1つ越えて移動しても、その結果が障壁を形成しない構造であるならば、それはECPを満たすことになる。

### 3.1.3. Chomsky(1987)の問題点

中島(1987)や藤田(1988)が問題として指摘しているように、補文内や目的語のNP内からの摘出は、条件(21)により、それぞれ[VP, VP][VP, CP]、[VP, VP][VP, NP]という2つの障壁を越えることになってしまう。

- (23) a. ... [ut']<sub>i</sub> [uP V [uP t']<sub>i</sub> C [iP...t]<sub>i</sub>..  
 b. ... [ut']<sub>i</sub> [uP V [uP t']<sub>i</sub> [N·N t]<sub>i</sub>...

この問題に対しては、Epstein(1987)の見解が解答を与えてくれる。Epstein(前掲)も、かつての「空範疇原理」に見られる不均衡を解消するため、語彙的統率・ $\theta$ 統率を $\alpha$ 統率に1本化することを試みている。Chomsky(1986b, 1987)は、目的語の移動の際に、VP付加を活用したが、Epstein(前掲)は、VPの指定部経由を利用する。

- (24) a. ... [ut'] [uP V t]] (Chomsky)  
 b. ... [ut'] [u·V t]] (Epstein)

Epstein流には、(23)の移動は、(23')である。

- (23') a. ... [ut']<sub>i</sub> [u·V [uP t']<sub>i</sub> C [iP...t]<sub>i</sub>..  
 b. ... [ut']<sub>i</sub> [u·V [uP t']<sub>i</sub> [N·N t]<sub>i</sub>..  
 $\alpha = V'$ 、 $\beta = t'$ <sub>i</sub>、 $\gamma = \text{CP}$ または $\text{NP}$ 、 $\delta = V$

(23')においては、各々[V', CP]、[V', NP]という障壁のみが形成されており、下接の条件は満たされる。ところが、(23')でも、ECPが満たされない。付加構造を生成する移動では、移動の際の障壁がそれに付加した要素を排斥しなくなるために、 $\alpha$ 統率の障壁にはならないが、一方、(23')では、移動後もCP/NPが $\alpha$ 統率に対する障壁として活きている。そこで、Epstein(前掲)は、 $\alpha$ 統率をもう1歩進める。

Chomsky(1986b)は、主語とIとの一致を「指定部—主要部一致(SPEC-head agreement)」という形で一般化することにより、CPの指定部にあるWH句が主要部Cと一致することで選択制限を満たすことが捉えられ、選択関係というものが、主要部と主要部との関係として統一的に扱うことができると論じている。また、この見解の根底には、指標に関する次のような前提がある(Chomsky(1986b):79)。

- (25) SPEC-head agreement and chains involve the same indexing.

つまり、Chomsky(1981)とは異なり、束縛理論に関する「下付指標」と一致に関する「上付指標」とを区別しないのである。Epstein(前掲)は、この一致関係をVPにも応用し、(23')でNPがVPの指定部を経由する際に、「指定部—主要部一致」によ



りVがNPと一致すると述べる。

(23") a. ... [<sub>NP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>U</sub> V<sub>i</sub> [<sub>CP</sub> t<sub>i</sub> ...

b. ... [<sub>NP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>U</sub> V<sub>i</sub> [<sub>NP</sub> t<sub>i</sub> ...

(23")で、t<sub>i</sub>はt<sub>i</sub>をa統率しないが、t<sub>i</sub>は指標iを持つV<sub>i</sub>によりa統率されることでECPを満たす。この分析の背景には、もう1つの(a)統率に関する新たな提案がある。

(26) 適正統率者は、X<sup>0</sup>要素に限られる。

(26)は、Lasnik & Saito(forthcoming)も提唱しており、この制限は、また、主語の移動が、IPへの付加を経由しても、ECPが満たされ得ないことを説明する。

(27) a. \*Who<sub>i</sub> did you believe that t<sub>i</sub> would win?

b. who<sub>i</sub> ... [<sub>CP</sub> t<sub>i</sub> that [<sub>IP</sub> t<sub>i</sub> [<sub>IP</sub> t<sub>i</sub> ...

(27b)において、もし、t<sub>i</sub>がt<sub>i</sub>によりa統率されたならば、たとえ、t<sub>i</sub>の方がa統率されないとしても、中間痕跡であるため削除され(cf. §4.2.1.2.)、γマークされたt<sub>i</sub>のみが残る適格な表示になってしまう。しかし、(26)を仮定することにより、(27b)のt<sub>i</sub>が、XP要素であるt<sub>i</sub>にa統率されることはなく、γマークされないまま残り、ECPが問題の表示を正しく不適格と判断する。(u<sub>i</sub>をも削除することは、拡大投射原理に違反する。)

以上、Chomsky(1987)の問題点を克服するために、①VPの指定部経由、②統率者は、X<sup>0</sup>要素に限る、というEpstein(前掲)(および②に関しては、Lasnik & Saito(forthcoming)も)の提案を採用した。しかし、(23a)の方には、まだ、考慮すべき現象が存在する。

(28) a. Who<sub>i</sub> do you think that Bill saw t<sub>i</sub>?

b. \*Who<sub>i</sub> did you quip that Bill saw t<sub>i</sub>?

(28a)が適格であるので、それと同じ派生過程をもつ(28b)も、適格であるはずである。このいわゆる「橋渡し動詞(bridge verb)」についての問題は、移動に対する「固有障壁」の役割が関わっていると思われる。もし、(28b)の埋め込み節が主動詞quipの補部ではないと仮定すれば(cf. Fukui(1986))、そのCPは、Hマークされないで、固有障壁を形成する。そして、固有障壁を越えることは、文法性をさらに低下させると考えれば、(28)の対照が捉えられよう。次の例が示すように、同じ分析がフィンランド語にも必要である。

(29) a. Minkä<sub>i</sub> rikoksen sanoit, että hän on tehnyt t<sub>i</sub>?

what crime-A said-2S that he has done

「彼がどんな罪を犯したと、君は言ったのか。」

b. ?\*Mitä<sub>i</sub> kadut, että menetit t<sub>i</sub>?

what-P regret-2S that lost-2S

「君は、何を失ったのを後悔しているのか。」

### 3.2. 格理論(Case Theory)

格理論でその最重要の地位を占めていた「格フィルタ(全ての音形を持つNPは、抽象格を付与されねばならない)」は、その効果を $\theta$ 規準に還元しようとする試みにより、その独立的地位が危うくなっている。それゆえ、現在の格理論の主眼点は、いかに格が付与されるかという問題に移ってきている。格標示が統率下でなされることや、S構造で標示される「構造格(structural Case)」とD構造で与えられる「内在格(inherent Case)」が区別されることは、従来から重要な点として認められてきた。それに加え、Chomsky(1986a)では、全ての語彙範疇V、P、N、Aが格を与えることや、D構造での「格付与(Case Assignment)」とS構造での「格実現(Case Realization)」とが区別されることなどの改訂が提示されており、また、内在格と $\theta$ 標示との関連は、「一様性の条件(Uniformity Condition)」により制約される。

#### (30)一様性の条件

もし $\alpha$ が内在格標示者ならば、 $\alpha$ は、NPが頭部である連鎖を $\theta$ 標示する時、そしてその時のみNPを格標示(=格付与、格実現)する。

2つの構造格(主格、対格)については、各々、その格標示者が異なる。主格は、[+Agr]素性を含むIがその統率する要素に与え、対格は、動詞がそれを補部に与えるというのが一般的な見解である。しかし、フィンランド語では、これがそのまま当てはまらないが、これについては、後述する。

## 4. フィンランド語の移動現象

本章では、フィンランド語の移動現象を考察し、この言語の統語構造について、一つの提案を行なう。

### 4.1. 受動構文と繰り上げ(raising)構文

$\theta$ 規準などの原理により、NPのA位置への移動(A移動)は、「主語」の位置への移動に限られる。英語におけるA移動を含む代表的な構文として、「受動構文」および「繰り上げ構文」が挙げられよう。以下では、この2つの構文に対応するようなフィンランド語の構文について考察し、この言語では、英語などとは異なり、これらの構文にはA移動が関与していないと議論する。

#### 4.1.1. 受動構文

(31) Talo rakennetaan tiilistä. 「家は、煉瓦でつくられる。」

house-N build-PASS brick-ELA

(32) Sinne vietiin lahja. 「そこへ贈物が持って行かれた。」

there took-PASS present-N

(33) Tuota tyttöä rakastetaan. 「その女の子は、愛されている。」

that-P girl-P love-PASS

上のようなフィンランド語の「受動構文」は、以下の特徴を持っている。

①不明の人物による行為を表現する。<sup>9)</sup>

- (34) a. Ikkuna avattiin. Cf. b. Ikkuna avautui.  
 window-N opened-PASS opened  
 「窓が(誰かに)開けられた。」 「窓が開いた。」

②対応する能動文の主語を表す(英語のby句に当たる)表現とは共起しない。

- (34') \*Ikkuna avattiin pojalla. 「窓が少年によって開けられた。」  
 boy-ADE

③自動詞からも形成される。

- (35) Yöllä nukutaan. 「夜、人々は眠る。」  
 night-ADE sleep-PASS

②と③の事実から、フィンランド語の「受動構文」は、「非人称(受動)構文」であることが察せられる。英語であれば受動文の主語にあたるであろう名詞句に関する以下の事実がそれを強く支持している。

④能動態動詞の目的語は、「受動構文」においても目的語である。

④1. 対格目的語が人称代名詞の時、「受動構文」でも対格のままである。

- (36) a. Hänet tapettiin. a'. \*Hän tapettiin.  
 she-A killed-PASS she-N  
 「彼女は、殺された。」

④2. 語彙格(内在格)を付与されたNPは、その格を保持する。

- (37) a. Vaimoa pelätään. a'. \*Vaimo pelätään.  
 wife-P fear-PASS wife-N  
 「妻は、恐れられている。」

- Cf. b. Mies pelkää vaimoa. b'. \*Mies pelkää vaimo / vaimon.  
 man-N fears wife-P wife-N / wife-A  
 「男は、妻を恐れている。」

フィンランド語の動詞の中には、その目的語に対して特定の格(語彙格)を要求するものがある(cf. 後掲の(58))。分格もそのような格の1つであり、動詞pelkää-は、分格目的語を取る(37b)。受動構文(37a)でも、名詞句vaimo-aが分格標示され、主格形にはならないこと(37a')は、それが動詞pelkää-の目的語のままであるからだと考えられる(例(33)も同じ)。

④3. 否定文の「受動構文」においては、否定分格が現れる。

- (38) a. Kirjaa ei luettu. a'. \*Kirja ei luettu.  
 book-P NEG read-受過分 book-N  
 「本は、読まれなかった。」  
 b. \*Pekkaa ei lukenut kirjaa.  
 Pekka-P NEG read book-P

- b'. Pekka ei lukenut kirjaa. 「ペッカは、本を読まなかった。」  
 Pekka-N NEG read book-P

もし、「受動構文」において、対応する能動文の目的語kirjaが主語になったとするならば、(38b)が不適格で、(38b')が適格であるのと平行的に、(38a)が不適格で、(38a')が適格であるはずである。しかし、実際には、「受動構文」が否定文の時は、名詞句kirjaは、(まさに、目的語がそうであるように)分格形でなければならない。

④の諸事実が示すように、フィンランド語の「受動構文」で主格形で表示され得る要素に相当する名詞句は、統語的に目的語の特徴を有している。さらに、フィンランド語では、主格標示された名詞句は、主語であるとは限らず、統語的環境に基づき、目的語が主格形で生起することがある。

- (39) Paras on tehdä työ ajoissa valmiiksi.  
 best is to=do work-N times-INE ready-TRAN  
 「仕事を時間内に仕上げるのが最良だ。」 (不定詞句)
- (40) Sanokaa tämä lause japaniksi!  
 say!-2P this-N sentence-N Japanese-TRAN  
 「この文を日本語で言って下さい。」 (命令文)

以上のことを考慮すると、フィンランド語の「受動構文」は、主語へのA移動を含む構文ではなく、「非人称構文」であることが理解される(cf. Ostman(1981))。非人称構文の主格名詞は、主語ではなく、目的語であると結論づけられ、文頭に現れる例は、この言語で一般的な「主題化」(cf. §4.2.2.)の結果である。

#### 4.1.2. 繰り上げ構文

- (41) a. Isä näyttää lukevan lehteä.  
 father-N seems read-能現分 paper-P  
 b. Näyttää, että isä lukee lehteä.  
 seems that father-N reads paper-P  
 「父は、新聞を読んでいるようだ。」  
 b'. \*Isä; näyttää, että t<sub>i</sub> lukee lehteä.
- (42) a. Sinä kuulut saaneen kirjeen.  
 you-N be=said-2S get-能過分 letter-A  
 b. Kuuluu, että sinä sait kirjeen.  
 be=said-3S that you-N got letter-A  
 「君は、手紙を受け取ったそうだね。」  
 b'. \*Sinä; kuulut/kuuluu, että t<sub>i</sub> sait kirjeen.

(41a)および(42a)の例文は、補文に不定詞ではなく、分詞形が現れているが、同じ認知的な意味内容を表す(41b), (42b)や英語との平行性からも、繰り上げ構文に相当すると思われる。また、一般的な見解として英語などの言語における繰り上げ

構文（および例外的格標示の構文）では、補文にCP削減(CP-reduction)/S' 削除(S'-deletion)なる規則( $[_{CP}[_{IP}..] \rightarrow [_{IP}..]$ )が適用される(cf. Chomsky(1986b):78)。フィンランド語の非文法的な(41b'), (42b')の例文や(43)にみるように間接疑問文の「分詞構文<sup>10)</sup>」が存在しない（すなわち、補文にCの投射が存在しない；§4.2.1. 参照）ことから、類似の説明がフィンランド語の繰り上げ構文を含む分詞構文一般に対しても可能であることが察せられる。

(43) a. \*En tiedä, [mitä hänen kirjoittaneen].

NEG-1S know what-P he-G write-能過分

「私は、彼が何を書いたか知らない。」

Cf. En tiedä, mitä hän kirjoitti.

what he-N wrote

b. \*En tiedä, [kirjoittaneenko hänen tuon kirjan].

write-能過分-KO that book-A

「私は、彼がその本を書いたのかどうか知らない。」

Cf. En tiedä, kirjoittiko hän tuon kirjan.

wrote-KO

さらに、繰り上げ動詞の補部である分詞構文が文の特徴を有することは、その構文中に文を修飾する副詞が生起すること(44)や、分詞形動詞が時制・法要素を含んでいること(45)からも窺われる。

(44) Huomattiin [hänen onneksi osaavan puolaa].

noticed-PASS she-G fortunately can-能現分 Polish-P

「彼女が運良くポーランド語ができると分かった。」

(45) a. Tiedän äidin osaavan puolaa.

know-1S mother-G can-能現分

「私は、母がポーランド語ができるのを知っている。」

b. Tiedän äidin osanneen puolaa.

can-能過分

「私は、母がポーランド語ができたのを知っている。」

ゆえに、S 構造において分詞構文が属する範疇はIPであり、(41a)および(42a)の構文は、英語と同じ繰り上げ構文であると分析可能であるかも知れない。

(41')  $[_{CP}[_{IP_1}isä_i; [_{I'}I_1 [_{UP_1}näyttä- [_{IP_2}t_i; [_{I'}I_2 [_{UP}luke- lehteä]]]]]]]]]$

では、Chomsky(1986b, 1987)は、繰り上げ構文にいかなる分析を施しているのだろうか。

#### 4.1.3. フィンランド語の節構造

(41')の構造における連鎖( $isä_i, t_i$ )は、最小条件により下接の条件およびECPを満たしていない( $\alpha=I'$ 、 $\beta=t_i$ 、 $\gamma=VP_1, IP_2$ 、 $\delta=I_1$ )。Chomsky(1986b:75)は、

「拡張連鎖(extended chain)」の概念を導入して、ECP違反を救済している。

(46) a.  $C=(\alpha_1, \dots, \alpha_n, \beta)$  is an extended chain if  $(\alpha_1, \dots, \alpha_n)$  is a chain with index  $i$  and  $\beta$  has index  $i$ .

b. Chain coindexing holds of the links of an extended chain.

(41')で、

①VがIに移動し、 $V_I$  (時制形の動詞) になり、

② $V_I$ と主語との間で一致関係が成立する

ことによって(41'')が成立する。( $t_i$ はisäの、 $t_j$ はnäyttä-の、各々痕跡である。)

(41'')  $[[isä_j [I \cdot näyttä-I_j] [_{VP1} t_j] [_{IP2} t_i] [I \cdot luke_k-I] [_{UP} t_k \text{ lehteä}]]]]]$

(41'')において  $j=i$  であるので、形成される拡張連鎖は、

(47)  $(isä_j, näyttä-I_j, t_j, t_i)$

である。(41'')では、 $t_i$ は $t_j$ によってa統率され、(47)の全てのリンクにおいて、ECPが満たされることになる。

しかし、移動に課された制約である下接の条件の違反は、拡張連鎖によっても解消されない。下接の条件を満足させるためには、少なくとも二つの障壁( $VP_1$ ,  $IP_2$ )の内、どちらかが存在しなければよい。そのような構造の1つの可能性として(48)を考えてみよう。

(48)  $[_{CP}[_{UP1} isä_i] [_{VP1}[_{U1} näyttä-I]_i] [_{UP2} t_j] [_{VP2}[_{U2} luke-I] lehteä]]]]]$

(48)は、以下の特徴を有する。

(49) a. 非語彙範疇Iは、独立した節点を占めるのではなく、V内部にある。

b. 主語は、VPへの付加要素として生成される。(小節(small clause)に与えられた類似の分析の可能性については、Chomsky(1986b):16, 20-21 また、日本語においても主語が付加要素であるとする提案については、外池(1988)参照。)

(48)の構造は、痕跡に課された諸条件を満たしている。(VP\*とVPは、付加構造を形成し、各々segmentにすぎず、合せて1つの範疇を成す。なお、いわゆるSを形成するVPを便宜上、'VP\*'と表記する。)

**下接の条件**:  $isä_i$ は、障壁を1つも越えない。なぜならば、 $t_i$ が $V_1$ の補部に被覆されても、包含されていないからである。

**ECP**: 統率者 $[_{U1} V+I]_i$  ( $isä_i$ と主-述関係により一致)と $t_i$ との間に障壁は存在しない。

**L統率**: この条件については、Chomsky(1987)の見解も明確ではないが、フィンランド語では、補文の $[_{U2} V+I]$ がL統率者として、 $t_i$ をm統御すると考えられる。

さらに、フィンランド語において(48)の構造を採用ことは、いくつかの利点をもたらしてくれる。

#### 4.1.3.1. 非語彙範疇I

フィンランド語では、英語のように独立した I を設ける強い根拠がない。一般の動詞と異なった統語的振舞いをする「助動詞」は存在しない。ただ、否定動詞が候補として挙げられるかも知れない(cf. Vainikka(1987))が、統語的には、他の動詞とほとんど変わらず、また、注5で述べたように、否定動詞がその補部としてVPを選択すると考えると、否定文における人称変化(否定動詞)と時制・相(本動詞)の分離という現象が、フィンランド語では、[V+I]が語彙的要素として生成されるという提案のもとで説明することができる。

(50) a. en antanut 「私は、与えなかった」

NEG-1S give-能過分

b. ...[<sub>UP</sub>NEG-I<sub>1</sub> [<sub>UP</sub>V-I<sub>2</sub>...

(50b)において、I<sub>1</sub>が人称を担当し、I<sub>2</sub>が時制・相を担当する。

#### 4.1.3.2. 構造格

フィンランド語における、構造格の分布を説明することができる。

(3) a. Esa luki kirjan. 「エサは、本を読んだ。」

Esa read book-A

(32) Sinne vietiin lahja. 「そこへ贈物が持って行かれた。」

there took-PASS present-N

(37) b. Mies pelkää vaimoa. 「夫は、妻を恐れている。」

man fears wife-P

フィンランド語において、目的語は、対格(3a)だけではなく、もう1つの構造格の「主格」で標示される場合(32)がある。さらに、「分格」などの内在格によって標示される「斜格目的語」も豊富に観察される(37b)。主格目的語は、統語的環境により、斜格目的語は、主に動詞により要求される。

#### 主格目的語

##### ①非人称構文

(51) Ovi suljetaan tällä avaimella. 「この鍵でドアがしまる。」

door-N shut-PASS this key-ADE

##### ②命令文

(52) Lue tämä kirja! 「この本を読みなさい。」

read!-2S this-N book-N

##### ③不定詞句

(53) Pekan täytyy kirjoittaa kirje.

Pekka-G must-3S to=write letter-N

「ペッカは、手紙を書かなければならない。」

分格(目的語)には、「分割可能性(divisibility)」という概念が深く関わりを持っているが(cf. Hoover(1984), 松村(1985))、具体的な用法としては、以下が挙

げられる。

### 分格目的語

#### ①不定部分

- (54) Pöydällä on ruokaa. 「テーブルの上に食物（の一部）がある。」  
table-ADE is food-P

#### ②未完了文の目的語

- (55) Äiti kutoo villapaitaa. 「母はセーターを編んでいる。」  
mother sews sweater-P

Cf. Äiti kutoo villapaidan kolmessa päivässä.

mother sews sweater-A three-INE day-INE

「母は、3日でセーターを編んでしまう。」

#### ③否定文の目的語

- (56) Tyttö ei silittänyt paitoja.  
girl-N NEG ironed shirts-P

「少女は、シャツにアイロンをかけなかった。」

#### ④目的語に分格を要求する動詞(分格動詞)

- (57) Olin odottanut parempaa tulosta.  
had-1S waited better-P result-P

「私は、もっといい結果を待っていた。」

分格動詞のように、目的語に特定の内在格(語彙格)を要求する動詞もある。

### 語彙格目的語

- (58) a. Pidän mustasta kahvista. 「私は、ブラックコーヒーが好きだ。」  
like-1S black-ELA coffee-ELA (出格)

- b. Se ei kelpää mihinkaan. 「それは、何の役にも立たない。」  
it NEG suit anything-ILL-KAAN (入格)

- c. Sinä näytät vähän väsyneeltä.  
you-N seem-2S a=little tired-ABL (離格)

「君は、少し疲れているようだね。」

- d. Sisareni jää naimattomaksi. 「私の妹は、まだ未婚だ。」  
sister-my remains unmarried-TRAN (変格)

目的語を標示するこれらの格の間には、統語的な「維持」の強さを示す階層(61)が存在する。

- (59) Älä lue tätä kirjaa! 「この本を読むな。」 (Cf. (52))  
NEG!-2S read this-P book-P

- (60) En pidä mustasta kahvista. (Cf. (58a))  
NEG-1S like black-ELA coffee-ELA

「私は、ブラックコーヒーは好きではない。」



(61) 語彙格>否定分格>対格・主格

肯定文においては、対格・主格標示されるべき環境にあっても、否定文では、分格のみが可能であり(59)、語彙格の目的語は、否定文中でも分格にはならず、その語彙格が保持される(60)。

以上の事実から、「動詞は、その補部を対格標示する」という、GB理論の一般的な規約は、フィンランド語では妥当ではない。特に、目的語が、ある統語的環境で主格標示される現象を説明するためには、フィンランド語の動詞の格付与情報は、基本的に(62)であると考えることが必要である(岸田(1988):42)。

(62) フィンランド語の動詞の辞書内における格付与情報

a. [-Case] b. [+~ Case] c. [uCase]

(62a)は、自動詞であり、(62b)は特定の語彙格を要求する動詞の持つ格付与素性である。問題の対格目的語を取り得る(つまり、目的語が統語的環境により主格形と交替する)動詞は、その補部(目的語)の格については無標示(unmarked)であり、対格は、既定的な(default)格として(すなわち、他の要素により何らかの格が標示されない時)目的語に与えられる。これらの前提および主格標示に関する従来の仮定と(48)の節構造を考え合わせると、フィンランド語における主格標示は、次の2つの過程を採ると考えてよいであろう(Webelhuth(1986)は、ドイツ語について類似の主格標示を提案している)。

(63) 主格標示者は、I [+Agr]である。

①主語に対しては、述部VPを通じて主格が与えられる。

②目的語の主格標示は、主語を標示しない場合、直接Iによってなされる。

「主語を(主格)標示しない場合」とは、統語的に主語(外部項)が存在しない時である。つまり、目的語が主格標示される構文では、付加主語が存在しない(類似の見解として、Borer(1986)は、非θ位置の主語の生成を義務的でないとする)。

(64) a. Syötiin kala. 「魚が食べられた。」

ate-PASS fish-N

[<sub>CP</sub>[<sub>UP</sub>·syö-dA-I kala]] (-dA-は、受動形態素)

b. Söin kalan. 「私は魚を食べた。」

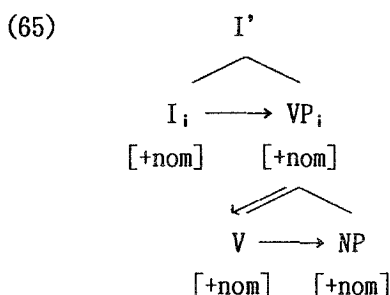
ate-1S fish-A

[<sub>CP</sub>[<sub>UP</sub>·pro [<sub>UP</sub>syö-I kala]]]

ここで、フィンランド語の節を英語と同じ構造として分析した場合(41')の可能な主格標示分析の1つ(cf. 岸田(1988))を(63)と比較してみよう。以下、節の統語構造に対する現在の分析を「付加分析」、そして、英語と類似の分析を「指定部分分析」と呼ぶことにする。

フィンランド語の主格形目的語は、主語が存在しない時に生起することから、主語に対して向けられるIの主格標示特性が目的語に対して働きかけると考えられる。しかし、「指定部分分析」においては、Iが直接に動詞の目的語に主格を付与するこ

とは不可能である。なぜならば、VPが格標示にとって（最小）障壁になるからである。そこで、主格目的語という有標な現象を引き起こす有標条件として、フィンランド語では、VPも主格標示され得ると仮定することが可能であるかも知れない。主格標示されたVPから浸透により、その主格素性を主要部Vが受け継ぐ。その素性を受け継ぐことができるのは、辞書において[uCase]の素性を担っている（むしろ、格付与素性を持たないと言ってもよいかも知れない）動詞のみである。それ以外の格素性情報を持つ動詞では、一種の素性衝突を起こすために浸透が起こらない。主格素性[+nom Case]を獲得した動詞は、それを格付与素性とし、その目的語を主格標示する。



これが、「指定部分分析」における、目的語への主格標示過程の一案である。この分析で問題となるのは、VPへの主格標示であろう。仮定としては、多少、有標過ぎるのではないと思われる(Davis(1987)は、VPへの格標示を普遍的に不可能であろうと述べている；また、Stowell(1981)のCase-Resistance Principle<sup>11)</sup>も参照)。確かに、NP以外の範疇も(主)格を与えられる現象があるという分析もなされている<sup>12)</sup>ので、一概にVPが(主)格標示されるという仮定を退けることはできない。しかしながら、「付加分析」では主格の標示方法が2通りあるものの、それは、外部項と内部項との形式的な相違により帰結されるものであるように思われる(cf. Williams(1980, 1984))。さらに、「付加分析」に比べると、「指定部分分析」は、その効用が限られている。つまり、他の統語現象も考慮すると、「指定部分分析」よりも、その説明力において、フィンランド語の節構造(48)を想定した「付加分析」の方が優れている。次の現象もその1つの証拠である。

#### 4.1.3.3. 繰り上げ構文+受動構文

繰り上げ動詞の補部が受動（非人称）分詞の「分詞構文」である場合を説明することができる。

- (66) Sinä näyt asetetun ensimmäiselle ehdokassijalle.  
 you-N seem-2S place-受過分 first-ALL place=on=the=list-ALL  
 「君は、リストの最初にあがっていたようだ。」

[<sub>CP</sub>[<sub>UP=1</sub>sinä; [<sub>UP1</sub>näky-I; [<sub>UP=2</sub>t'; [<sub>U</sub>asetetta; -I t; ...]]]]]

フィンランド語の非人称構文は、A移動を含まないことを§4.1.1.で述べたが、も

し仮に(66)をA移動が関与していると考えた場合、 $t_i$ から文頭の $\text{sinä}_i$ への直接の移動は、(少なくとも)  $\text{VP}^*_2$ が障壁となり、ECPが満たされないため、(66)が非文法的という誤った予想をしてしまう。それを回避するためには、 $\text{VP}^*_2$ の指定部(非A位置)を経由して、文頭に移動したと分析しなければならない。だが、その場合、文頭の位置が付加位置(非A位置)でなく、A位置(IPの指定部など)であるのなら、 $t'_i$ から  $\text{sinä}_i$ への移動は、不適切な(improper)移動になる( $\text{A} \leftarrow \text{非A} \leftarrow \text{A}$ )。ゆえに、主語を付加要素として分析した場合のみ、非A移動が関与する非人称構文と繰り上げ構文とが含まれる構造が説明可能となる。

なお、(66)の「バリエーション」として、(67)が存在する。

- (67) Sinut näkyy asetetun ensimmäiselle ehdokassijalle.  
you-A seems

(67)の文頭の代名詞は対格形であり、動詞は3人称単数形である。(66)と(67)の違いは、文頭の名詞句が主文動詞 $\text{näky}$ -の統語的主語として解釈されるか否かに依存する。(66)は、当該の名詞句が主語として解された場合で、主格は、 $\text{VP}_1$ を通じて与えられる。この場合、分詞形動詞は、移動した名詞句の痕跡に対格を与えない。なぜならば、対格は、フィンランド語では既定格であり、(66)では連鎖の頭部である代名詞が主格標示されているため、付与されないのである。一方の(67)は、純粋な主題化移動で、文頭名詞句は、連鎖の末端要素に与えられる対格形で現れる。このような2種の派生が可能であるのは、(主語が付加要素であり、)対格が既定格であるためである。ゆえに、分詞形動詞が語彙格を付与する動詞である場合、(66)のような主格形主語を持つ表層文は、D構造で与えられた語彙格(内在格)とS構造で与えられる主格(構造格)との間で格の不一致が生じ、その結果、非文法的な文として排除される。語彙格動詞の場合は、従って、(67)のタイプの文のみが文法的な文として許容される。

- (68) a. Näyttää, että sinua pelätään. 「君は、恐れられているようだ。」  
seems that you-P fear-PASS  
b. Sinua näyttää (/näytetään) pelättävän.  
you-P seems (/seem-PASS) fear-受現分  
c. \*Sinä näytät (/näytetään) pelättävän.  
you-N seem-2S
- (69) a. Kuuluu, että kahvista pidetään tässä maassa.  
is=said that coffee-ELA like-PASS this country-INE  
b. Kahvista kuuluu pidettävän tässä maassa.  
coffee-ELA like-受現分  
「コーヒーがこの国で好まれているようだ。」  
c. \*Kahvi kuuluu pidettävän tässä maassa.  
coffee-N

#### 4.1.4. フィンランド語の統語構造

以上をまとめると、フィンランド語の節構造は、

(70) [<sub>CP</sub>.. [<sub>C</sub>·C [<sub>UP</sub>·NP<sub>i</sub> [<sub>UP</sub>·V-I<sub>i</sub> ... ]]] または [<sub>CP</sub>.. [<sub>C</sub>·C [<sub>UP</sub>·V-I<sub>i</sub> ... ]]]  
であると分析される。さらに、英語などではA移動を含む構文に対応する表現であるフィンランド語の構文においては、A移動が関与していないという観察がなされた。次に、(70)の構造をもとに、WH移動に代表される、英語の非A移動について、フィンランド語ではいかなる対応を示すかという問題に議論を移す。

#### 4.2. 非A移動

Chomsky(1986b)では、WH要素の移動は、CPの指定部への代入移動と捉えられている。また、主題化については、ふつう、S (英語: IP、フィンランド語: VP\*) への付加移動として分析される(cf. Baltin(1982), Saito(1987), Lasnik & Saito (forthcoming))。言語によっては、統語部門においてWH移動が観察されるものと、日本語のようにそのような移動を持たないものとの2タイプが存在する。フィンランド語は、前者のタイプに属し、そのWH要素の移動現象は、基本的なものについて英語と類似した結果が観られる。一方、主題化移動は、英語に比べてはるかに自由であり、これがこの言語の自由な語順の要因となっている。以下では、フィンランド語のこれら2つの非A移動について、それぞれ考察を行ない、最後に、関連する他の構文についても言及する。

##### 4.2.1. WH移動

WH移動が関与する構文としては、疑問文、関係節、比較構文などが挙げられる。

- (71) a. Kuka lahjoitti ruusuja Sirpalle? (疑問文)  
who-N presented roses-P Sirpa-ALL  
「誰が、シルパにバラを贈ったの。」  
b. Tuo on se veljeni, joka on lääkäri. (関係節)  
that is the brother-my who-N is doctor  
「あれが、医者をしている私の兄だ。」  
c. Vamma on vaarattomampi kuin miltä se alussa näyttikään.  
injury is harmless-CMP than what-ABL it at=first seemed-KAAN  
「怪我は、最初に思ったよりも軽い。」 (比較構文)

関係代名詞jo-kaの形態は、疑問詞(ku-ka, mi-kä)と異なるが、関係節からのWH要素の抜き出しが非文法的な文を生み出すことから、英語同様に関係代名詞がCPの指定部の位置を占めていることが推測される(cf. §4.2.1.4.)。

- (72) \*Minkä kirjan<sub>i</sub> Pekka tapasi lapsen, joka luki t<sub>i</sub>?  
what-A book-A Pekka met child-A who-N read  
「ペッカは、何の本を読んだ子供に会ったのか。」

本稿では、疑問文のみを考察の対象とする。

#### 4.2.1.1. フィンランド語の疑問文

フィンランド語でも、WH語および疑問接語(clitic)-K0が付された語句（以後、WH要素）が節頭に移動する。

(73) a. Kuka<sub>i</sub> t<sub>i</sub> kirjoitti tuon romaanin ? 「誰があの小説を書いたのか。」  
who-N wrote that novel-A

b. Haluaisin tietää, mistä<sub>i</sub> sait sen rahan t<sub>i</sub>.  
would=like-1S to=know what-ELA got-2S the money-A  
「君が、どこからその金を手に入れたかを知りたい。」

(74) a. Puhuuko<sub>i</sub> Pekka t<sub>i</sub> saksaa? 「ペッカは、ドイツ語を話すのか。」  
speaks-KO German-P

b. En tiedä, tuleeko<sub>i</sub> Martti t<sub>i</sub> huomenna.  
NEG-1S know comes-KO Martti tomorrow  
「マルッティが明日来るかどうかは知らない。」

(75) a. Ettekö<sub>i</sub> t<sub>i</sub> matkusta Suomeen?  
NEG-2P-KO travel Finland-ILL  
「フィンランドへは旅行しないのですか。」

b. Koulussako<sub>i</sub> Pekka on t<sub>i</sub>? 「ペッカがいるのは、学校か。」  
school-INE-KO is

(75a)の例が示すように、接語-K0は、否定動詞がある時は必ずそれに接尾する。<sup>13)</sup> また、(75b)のように、動詞だけではなく、疑問の焦点となる、文の他の要素にも接辞して、節頭に移動する。構造保持の原理により、WH要素は、その投射レベルに応じて、CPの指定部、または、主要部Cに代入移動すると考えられる。従って、(73a)および(74a)の2文は、各々次のS構造を成すことになる。

(76) a. [<sub>CP</sub>kuka<sub>i</sub> [<sub>C</sub>·C [<sub>UP</sub>·t<sub>i</sub> [<sub>UP</sub>kirjoitti ....]]]]  
b. [<sub>CP</sub>[<sub>C</sub>·puhuuko<sub>i</sub> [<sub>UP</sub>·Pekka [<sub>UP</sub>t<sub>i</sub> saksaa]]]]

ところが、(76a)の統語構造は、下接の条件とL統率条件は満たすが、ECPには違反する。なぜならば、kuka<sub>i</sub>は、X<sup>0</sup>要素ではないからである。しかし、「指定部－主要部一致」により、CPの指定部にあるkuka<sub>i</sub>がCと一致し、その結果、C<sub>i</sub>がt<sub>i</sub>をa統率する。よって、ECPが満たされることになる(cf. §3.1.3.)。

(76) a'. [<sub>CP</sub>kuka<sub>i</sub> [<sub>C</sub>·C<sub>i</sub> [<sub>UP</sub>·t<sub>i</sub> [<sub>UP</sub>kirjoitti ....]]]]

#### 4.2.1.2. 主語と目的語

英語と全く同様に、補文内からの移動の際に主語と目的語に関して、文法性の違いが観察される(cf. (9)も)。

(77) a. Kenet<sub>i</sub> luulet, että Pekka tapasi t<sub>i</sub>?

who-A think-2S that Pekka-N met

「君は、ペッカが誰に会ったと思うのか。」

b. \*Kuka<sub>i</sub> luulet, että t<sub>i</sub> tapasi Pekan?

who-N think-2S that met Pekka-A

「君は、誰がペッカに会ったと思うのか。」

例文(77)の統語構造は、(77')である。

(77') a. Kenet luulet [<sub>CP</sub> t] [<sub>C</sub>·että [<sub>UP</sub>·Pekka [<sub>UP</sub> t] [<sub>U</sub>·tapasi t]]]]

b. Kuka luulet [<sub>CP</sub> t] [<sub>C</sub>·että [<sub>UP</sub>·t] [<sub>UP</sub>·tapasi Pekan]]]

ECP:a. リンク1 (t', t) → (tapasi, t) → ○

リンク2 (t'', t') → ×

b. (t', t) → ×

(77' b)のリンクは、下接の条件は満足させるが、ECPは満足させられない。なぜなら、t'は、X<sup>0</sup>要素ではないのでa統率者になれないからである。また、Cにはすでに独自の指標を持つettäがあるために「指定部—主要部の一致」も行なわれない(cf. Lasnik & Saito(1984, forthcoming))。しかし、(77a)の文法的な文においても、(77' a)のリンク2がECPに違反している。ここでは、英語に与えられた説明がそのまま、フィンランド語の例をも説明してくれる。それは、Chomsky(1986b)が採用したLasnik & Saito(1984)の提案である。

(78)項の中間痕跡は、γマークを行なった後、随意的に削除される(Chomsky(1988b)によれば、項の中間痕跡が(義務的に)削除されるのは、LFにおける適格要素を形成するためである)。ゆえに、項の中間痕跡は、ECPとは無関係である。

→ECP: \*[[t]<sub>γ</sub>] at LF [Lasnik & Saito(1984):285]

Lasnik & Saito(1984)は、ECPをLF表示におけるγマーキングについてのフィルタとして捉えているが、基本的効果は、Chomsky(1987)のECPと同じである。(77' a)で、t'は動詞tapasiと一致した後、(t''ともども)削除され、tapasiによりγマークされたtのみが残る。一方、(77' b)では、t'は、統率者の候補でもなければ、ettäと一致することもできないので、tは、γマークされず、ECPによって非文法的なラベルが貼られる。<sup>14)</sup>

#### 4.2.1.3. 付加詞(adjunct)の抽出

(79) Miksi<sub>i</sub> uskot, että hän on tehnyt sen t<sub>i</sub>?

why believe-2S that he has done it

「君は、彼がなぜそれをしたと思うのか。」

(79') Miksi uskot [<sub>CP</sub> t] [<sub>C</sub>·että [<sub>UP</sub>·hän [<sub>UP</sub> t] [<sub>U</sub>·on tehnyt sen t]]]]

$$\text{ECP:リンク1 } (t', t) \rightarrow (V, t) \rightarrow \bigcirc$$
$$\text{リンク } 2(t'', t') \rightarrow \times$$

Lasnik & Saito(1984)およびChomsky(1986b)によれば、付加詞の中間痕跡は、削除されない。<sup>15)</sup> ゆえに、リンク2がECP違反となるが、(79)は文法的な文である。これに対しては、Chomsky(1987)と同(1986b)とは、異なった見解を示している。

(80) Chomsky(1987)とChomsky(1986b)

- Chomsky(1987)

統語部門における操作(「VP前置」)は、LFでも可能(だが、その逆は成り立たない)。(英語)

LFでのIPへのVPの前置後:  $[_{Cpt} [_{C:C} [_{IP[_{Upt'} [_{UP...}] [_{IPNP} ... ]}] ]]$

VPもIPも $t'$ を包含せず、リンク( $t''$ ,  $t'$ )は、ECPを満たす。

- Chomsky(1986b):46.

Lasnik & Saito(1984)に従い、 $\gamma$ マークは、項に関しては、S構造において、そして、付加詞に関しては、LFでなされると述べられている。<sup>16)</sup>

L Fでは、文の意味解釈に貢献しない要素that(フワ.että)は、任意に削除される。その結果、「指定部—主要部一致」の適用可能な環境が作り出され、リンク2もECPを満たすことになる。

フィンランド語では、「VP前置」なる統語操作が存在する可能性が低い(cf. 例文(6))。つまり、この言語では、Chomsky(1986b)の案がより妥当であると思われる。さらに、フィンランド語ではIの投射が存在しないので、I'の例外的特性(最小障壁にはならない; cf. Chomsky(1986b):48)を仮定する必要もない。

#### 4.2.1.4. 繼起的移動

フィンランド語のWH移動が、英語と非常に類似していることから、WH要素の「遠距離」継起的移動も見られることが予想され、事実、次のようなフィンランド語の文は、文法的である。(中間痕跡<sup>1</sup>は、 $\gamma$ マーク後、すべて削除される。)

(81) Minkälaisen kirjan; sanoit Pekan luulevan että Martti

what=kind=of book-A said-2S Pekka-G think-能過分 that Martti

kirjoitti  $t_i$ ?

wrote

「マルッティがどんな本を書いたとペッカが思っていると君は言ったのか。」

(81') [CP WH<sub>i</sub> [C C<sub>i</sub> [UP NP [upt' ; [U V<sub>i</sub> [cpt' ; [C C<sub>i</sub> [UP NP [upt' ; [U V<sub>i</sub> [cpt' ;

[<sub>C</sub>'C;<sub>i</sub>[<sub>UP</sub>.NP[<sub>UPT'</sub>; [<sub>U</sub>.V;<sub>i</sub> t<sub>i</sub>]]]]]]]]]]]]]]]]

さらに、下接の条件の違反も、以下に見る通りである。

(82) \*Minkälaisen kirjan; Pekka luulee, missä Martti osti t,?

what=kind=of book-A Pekka thinks where Martti bought

「マルッティがどこでどんな本を買ったとペッカは思っているのか。」

(82') [<sub>CP</sub>minkälaisen kirjan [<sub>UP</sub>\*Pekka [<sub>UP</sub>t'] [<sub>U'</sub>iluulee [<sub>CP</sub><sub>1</sub>missä [<sub>C</sub>C  
 [<sub>UP</sub>\*<sub>2</sub>Martti [<sub>UP</sub><sub>2</sub>t'] [<sub>U'</sub>osti t]]]]]]]]]]]

(82')では、t' から t' への移動に際し、 $\alpha = V'_1$ 、 $\beta = t'$ 、 $\gamma = CP_1/VP_2$ 、 $\delta = V$ の関係が成立し、2つの障壁[ $V'_1, CP_1$ ], [ $V'_1, VP_2$ ]が形成される。つまり、下接度2で文法的な文ではないと、正しく判断される。

以上の考察・分析から明らかなように、フィンランド語は、英語とは節の構造が異なるものの、WH移動では非常に類似した現象が観察され、それは、英語を説明するUGの諸原理で分析することができる。

#### 4.2.2. 主題化

「主題化」なる非A移動は、英語ではその適用がかなり制限されているが、フィンランド語ではその自由な語順を生み出す要因となっている。一般的に主題化は、Sへの付加として分析され、これは、この言語においても当てはまると思われる。

- (83) a. Kuka tapasi Pekan? 「誰がペッカに会ったのか。」  
 who-N met Pekka-A  
 b. Kuka Pekan tapasi? 「ペッカには誰が会ったのか。」  
 c. \*Pekan kuka tapasi?

(83c)から、CPへの付加ではないと判断することができる。

- (84) a. Erkki sanoi, että hän tapasi Pekan.  
 Erkki said that he met Pekka-A  
 b. Erkki sanoi, että Pekan hän tapasi.  
 「エルッキは、自分はペッカに会ったと言った。」

(84b)からは、C(=että)よりも右に位置することが観察される。ゆえに、フィンランド語の主題化もS、つまりVP\*への付加であると仮定できよう。<sup>17)</sup>

##### 4.2.2.1. 基底における主語の位置

フィンランド語の特徴として、主語は、基底で生成された付加要素である。その場合、述部VPに対する「主語」の位置としては、(85a)と(85b)の2つの可能性が存在する(cf. Borer(1986), Safir(1985))。



フィンランド語の主語への格標示・ $\theta$ 標示が方向に依るのではなく、VPとの姉妹関係(sisterhood)による標示であるとするなら、主語の基底位置は、VPの左側であるとは限らないことになる。すると、(3)の例文(下に再掲)の内、(85a)と(85b)に対応する(3a)と(3f)の2つは、そのまま基底生成される構造であると考えられる。



- (3) a. Esa luki kirjan.      c. Kirjan Esa luki.      e. Luki Esa kirjan.  
Esa read book-A

- b. Esa kirjan luki.      d. Kirjan luki Esa.      f. ?Luki kirjan Esa.

ただし、(3f)が全く容認可能であるわけではないのは、この言語が文頭に動詞が置かれている文（ただし、強調されている場合(3e)を除く）を「嫌う」ためである。

(86) 義務的な「主題」

• Finnish avoids verb-initial declarative sentences by moving some other constituent in front. [Karttunen(1975):236]

• .... the reason why the NPs .... are fronted is a general word-order constraint in Finnish against verb-initial sentences.

[Ostman(1981):287]

• [In Finnish] Each sentence has a topic: some nominal constituent that is located immediately in front of the finite verb.

[Karttunen & Kay(1985):282]

フィンランド語には、いわば「無標の主題化」というような原則が存在すると考えてもよいかもしれない。

(3e)以外の残りの文は、(3a)または(3f)の基底構造からの付加移動による主題化であり、各々、次のS構造が当てられる。

- (3'') c. [<sub>UP</sub> kirjan] [<sub>UP</sub> Esa [<sub>UPT'</sub> [<sub>U</sub> luki t]]]] (< a.)

- d. [<sub>UP</sub> kirjan] [<sub>UP</sub> [<sub>UPT'</sub> [<sub>U</sub> luki t] Esa]]] (< f.)

- b. [<sub>UP</sub> Esa; [<sub>UP</sub> kirjan]<sub>i</sub> [<sub>UP</sub> [<sub>UPT'</sub> [<sub>U</sub> luki t]]] t<sub>i</sub>]]] (< d. < f.)

(3e)は、定動詞をCに移動することによって、生成される。

- (3'') e. [<sub>CP</sub> [<sub>C</sub> luki [<sub>UP</sub> Esa [<sub>U</sub> t kirjan]]]] (< a.)

各々に与えられたS構造は、先の(3')の英訳が示すような、中立的な意味から外れた意味あいを含んでいるという事実を、統語的に付加構造として表示してくれるものである。<sup>18)</sup>

#### 4.2.2.2. 主題化の継起的移動

WH移動と同じく、主題化移動もCPの指定部を経由して、継起的移動を行なうことが可能である。

- (87) a. ?Tällaista<sub>i</sub>; tiedän, että Pekka pelkää t<sub>i</sub>.<sup>19)</sup>

this=kind-P know-1S that Pekka fears

- b. Tällaista<sub>i</sub>; tiedän Pekan pelkävän t<sub>i</sub>.

this=kind-P know-1S Pekka-G fear-能現分

「この種のものは、ペッカが恐れているのを、わたしは知っている。」

- (88) a. \*Kustannukset<sub>i</sub>; arvellaan, että t<sub>i</sub> nousevat miljooniin

costs-N think-PASS that rise-3P million-ILL

markkoihin.

marks-ILL

- b. Kustannusten; arvellaan t<sub>i</sub>; nousevan miljooniin markkoihin.  
costs-G think-PASS rise-能現分 million-ILL marks-ILL  
「費用は、何百万マルッカに上と考えられている。」

(87)~(88)におけるa.とb.の違いは、WH要素の場合と同じように分析される。

(87') Tällaista tiedän [cpt'] [c·C [up·Pekka- [upt'] [u·pelkä- t]]]]

EC P : リンク 1 (t', t) → (pelkä-, t) → ○

< 2 (t'', t') → × >

リンク 2 は、中間痕跡なので E C P とは無関係である。

(88') Kustannus- arvellaan [cpt'] [c·C [up·t [up...]]]]

EC P : (t', t) → a. ×

b. (C, t) → ○

b. のみが t' と C の「指定部—主要部一致」により文法的な文となる。

当然、下接の条件によって説明される「WH島の制約」にも従う。

(89) \*Tällaista; tiedän, kuka pelkää t<sub>i</sub>.

this=kind-P know-1S who-N fears

「この種のものは、誰が恐れているかを知っている。」

[up·NP<sub>i</sub> [up·NP [upt']<sub>i</sub> [u·V [cpWH<sub>j</sub> [c·C<sub>j</sub> [up·t<sub>j</sub> [upt']<sub>i</sub> [u·V t<sub>i</sub>]]]]]]]]]]

#### 4.2.3. Tough構文

現在、英語の tough構文は、補文の目的語から主文の主語の位置への移動としてではなく、補文内での空の演算子(null operator)の移動が関与する構文として分析されている。ゆえに、(90b)の英語の例は、下接の条件に違反するものとして処理される。

(90) a. John is too stubborn [cpOp<sub>i</sub> [ipPRO to talk to t<sub>i</sub>]]

b. \*John is too stubborn to visit anyone who talked to.

フィンランド語でも類似の表現が存在するが、いくつかの点で英語とは異なっている(cf. Breckenridge & Hakulinen(1976))。

(91) a. Mietintö oli hauska lukea.

report-N was-3S pleasant to=read

「報告書は、読んでおもしろかった。」

b. Mietinnöt olivat hauskoja lukea.

reports-N were-3P pleasant-PL-P to=read

c. Mietinnöt oli hauska lukea.

d. Mietintöä oli hauska lukea.

report-P

(91c)において文頭名詞(複数)と動詞(単数)が数において一致しておらず、また、(91d)では、普通は不可能な分格形の名詞句が「主語」であるように観察される(cf. 例(38))。

しかし、次の(92)から、主述一致している(91b)以外では、文頭の「主語」と思われた名詞句が、実は主語ではない可能性があることが察せられる。つまり、少なくとも、(91a, c, d)は、(92a)からの主題化として分析可能なのである。

(92) a. Oli hauska lukea mietintö/mietinnöt/mietintöä.

b. \*Olivat hauskoja lukea mietinnöt. (←(91b))

(93)は、それを裏付ける証拠である。

(93) a. On helppo suututtaa minut. 「私を怒らせるのは簡単だ。」

is easy to=anger I-A

b. Minut on helppo suututtaa.

c. \*Minut olen helppo suututtaa.

I-A am

d. \*Minä olen helppo suututtaa.

I-N am

問題の名詞句が人称代名詞である場合、(93b)に見るように、文頭にある時でも対格形であり、(93c)が示すように主文動詞と一致することもない。さらに、(93d)の非文からも、当該の構文が、主格主語を持ち得ないことが観られる。ゆえに、(93b)は、(93a)からの主題化移動であり、同一の構造を持つ(91)の諸例も、同様に分析されるべきである。従って、英語のtough構文とフィンランド語の類似の構文は、異なった分析がなされることになり、その結果、(94)のような両言語の文法性の違いを説明することが可能となる。

(94) a. Max is trying to be hard to get hold of.

b. \*Max yrittää olla vaikea tavoittaa.

tries to=be hard to=catch

「マックスは、捕らえられないようにしている。」

a'. [<sub>IP</sub>Max<sub>i</sub> [<sub>UP</sub>is trying [<sub>CP</sub>[<sub>IP</sub>PRO<sub>i</sub> to be hard [<sub>CP</sub>Op<sub>i</sub> [<sub>IP</sub>PRO<sub>j</sub> to get hold of t<sub>j</sub>]]]]]]]

b'. [<sub>UP</sub>Max<sub>i</sub> [<sub>UP</sub>yrittää [<sub>CPT</sub><sup>4</sup>; [<sub>UP</sub>t<sub>i</sub><sup>3</sup> [<sub>U</sub>olla vaikea [<sub>CPT</sub><sup>2</sup> [<sub>UP</sub>PRO<sub>j</sub> [<sub>UP</sub>tavoittaa t<sub>j</sub>]]]]]]]]]

(94a')の構造において、Maxは、動詞is tryingの主語であり、PRO<sub>i</sub>を制御する。そして、Op<sub>i</sub>は、t<sub>j</sub>からVPの指定部を経由して移動した空演算子であり、変項t<sub>j</sub>は、Op<sub>i</sub>を通して、PRO<sub>j</sub>に強束縛(strong bind)される。<sup>20)</sup> この構造は、英語の文法的な文を正しく予想してくれる。一方、(94b')のMaxは、t<sub>i</sub><sup>1</sup>から代入・付加を繰り返して、文頭に移動する。しかし、(94b')の構造表示が、投射原理を満たすためには、Maxは、動詞yrittääの主語でもなければならない。これは、明らかにθ規準の違反

であり、非文法的な文として判断される。

以上のように、フィンランド語の「tough構文」は、空演算子の移動を含むものではなく、補文の目的語の文頭への付加移動である。この分析で問題となる(91b)については、次のような現代フィンランド語の傾向が働いているためである。

- (95) .. even in modern Finnish, there is a tendency for clause initial  
nominatives to control verb agreement at least for number even if  
they are not subjects. [Breckenridge & Hakulinen(1976):51]

(95)の現象は、主題化された要素が主語と類似の付加構造([<sub>NP</sub>XP[<sub>NP</sub>..])を形成しているという統語的理由によって説明することができ、これは、フィンランド語の主語が付加要素である1つの裏付けとなろう。

#### 4.2.4. 基底生成された主題

フィンランド語の主語は、基底生成された付加要素であるが、同様に基底で付加要素として生成される主語以外の要素を持つ文はないだろうか。実際、次のフィンランド語の例がそのような文が存在する可能性を示唆している。

- (96) a. Siellä oli paljon / muutamia autoja.  
there was many some cars-P  
「そこには、多くの／いく台かの自動車があった。」  
b. Autoja siellä oli paljon / muutamia.  
(97) a. Autoja siellä oli kaksi. 「自動車がそこに2台あった。」  
cars-P there was two  
b. \*Siellä oli kaksi autoja.  
c. Siellä oli kaksi autoa.  
there was two car-P  
d. Meitä on kolme. 「我々は、3人だ。」  
we-P is three  
e. \*On kolme meitä.

(96a)にみるように、数量詞paljon, muutamiaは、その修飾する名詞が複数分格形であることを要求する。(96b)は、従って、(96a)から名詞autojaの非A移動による派生であると考えられるかも知れない。しかし、(97)から、移動による派生以外に可能な生成があることが認められる。「2」以上の数詞が修飾する名詞は、複数形ではなく、単数分格形である((97b)対(97c))。ところが、複数分格形名詞を文頭に持つ(97a)のような文法的な文がある。このフィンランド語の文は、非A移動による派生としては分析できない。なぜならば、その基底構造であろう(97b)が非文法的だからである。(97d,e)についても同様のことが言える。従って、例文(96b)および(97a,d)の表現は、基底生成された付加要素を文頭に持つ例であると分析される可能性があり、これも、主語を含め、基底生成される付加要素の存在を強く支持

するものであろう (Franks & House(1982)のロシア語の主題生格についての考察は上の現象と共通する点があり、共時的にも、通時的にも、興味深い)。

## 5. おわりに

本稿では、フィンランド語の移動現象と主格の分布を観察し、この言語の節の統語構造として、(98)を提案した。

(98)  $[_{CP} \dots [_{C'} C [_{UP} NP_i [_{VP} V-I_i \dots ]]]$  または  $[_{CP} \dots [_{C'} C [_{UP} V-I_i \dots ]]]$

①  $I_i$  は、 $V^0$ 内部にある。

②節の主語は、VPへの付加要素として生成され、義務的ではない。

(98)の統語構造を想定することにより、フィンランド語の諸現象を説明することができる。さらに、自由な語順は、非A移動による付加構造生成によると考えることで、基本語順から逸脱する文の意味を解釈することが可能となり、主語を付加要素とすることで、他の(主題化による)付加要素との間にみられるいくつかの共通性も捉えることができる。

今後の課題としては、種々の現象(埋め込み文など)をより詳細に検討し、また、統語構造(98)が、他の下位理論(例えば、束縛理論)に対していかなる問題を投げかけるかについても、考えていかなければならない。

## 注

\* 本稿は、京都大学言語学懇話会第17回例会(1988年7月16日、於京大会館)において口頭発表したものをもとに、修正を加え、まとめたものである。発表の際に、御意見・御教示をいただいた先生方および御出席の方々に対し、ここに感謝の意を表したい。また、インフォーマントとして、Erkki Hietalahti氏に御協力をいただいた。記して、謝意を表する。本稿の執筆にあたり、原稿に目を通し、懇切丁寧な助言を下さった、同じ研究室の先輩であり、本号の編集委員でもある、上山あゆみさんに、心から感謝する次第である。

- 1) Chomsky(1987)は、Chomskyが1987年来日時のセミナー内容であり、これは、加藤・内田(1987)、中島(1987)、藤田(1988)による。
- 2) 本稿でも、 $i, j=0$ (つまり最小投射)は $X$ または $X^0$ 、 $i, j=1$ は $X'$ 、 $i, j=2$ (つまり最大投射)は $XP$ と表すことにする。
- 3) 逐語訳中の略語：-N=主格、-A=対格、-P=分格、-G=属格、-ABL=離格、-ADE=所格、-ALL=向格、-ELA=出格、-ILL=入格、-INE=内格、-TRAN=変格；-PL=複数；-PASS・受=非人称(受動)、-! =命令形、NEG=否定動詞、能=能動、現分=現在分詞、過分=過去分詞、-2S=2人称単数、-3P=3人称複数、など；CMP=比較級；-KAAN=接語“too”、-K0=疑問接語。
- 4) フィンランド語に関する参考文献中、暗黙のうちにこの言語にVPを仮定しているものも多いが、Hakulinen & Karlsson(1979)やNevis(1988)は、どちらかとい

えば、VP支持派であり、一方、Karttunen & Kay(1985)やTaraldsen(1985)などは、フィンランド語を非階層的言語であると明言している。

- 5) フィンランド語(やウラル諸語)の否定詞は人称変化し、「否定動詞(negative verb)」と呼ばれる。

(i)	1	2	3
SG	en	et	ei
PL	emme	ette	eivät

しかし、現代フィンランド語の否定動詞は、「時制」および「法(命令法を除く)」を担うことができず、それらは本動詞の形態によって表される。例えば：

現在否定：否定動詞＋動詞語幹

過去否定：否定動詞＋過去分詞

(ii)	「与える」	「与えない」	「与えなかった」	「与えるな」
1SG	annan	<u>en</u> anna	<u>en</u> antanut	-----
1PL	annamme	<u>emme</u> anna	<u>emme</u> antaneet	<u>älkäämme</u> annako

また、「否定動詞＋動詞」の分析については、恐らく、英語の相動詞(aspectual element)＋動詞と同じ分析、つまり、否定動詞(や相動詞)は、VPを選択する動詞であると考えられるのではないと思われる(cf. Chomsky(1986b):73)。

(iii) ....[<sub>UP</sub>NEG[<sub>UP</sub>V....

ただし、(iii)のVPは、構造としては付加構造を成している。

- 6) フィンランド語は、いわゆるpro-drop言語である。

(i) a.	Siinä olet oikeassa.	「その点で君は、正しい。」
	it-INE are-2S right-INE	(argument)
b.	Sitä ei voi tietää.	「それは分からない。」
	it-P NEG-3S can know	(argument)
c.	Ulkona tuulee kovasti.	「外は風が強い。」
	outside blow-3S heavily	(quasi-argument)
d.	Pitää olla täsmällinen.	「時間厳守である。」
	should-3S to=be accurate	(expletive argument)

- 7) Lasnik & Saito(1984):240.

$\alpha$  properly governs  $\beta$  if  $\alpha$  governs  $\beta$  and

a.  $\alpha$  is a lexical category  $X^0$  (lexical government)

or b.  $\alpha$  is coindexed with  $\beta$  (antecedent government)

Chomsky(1986b):17.

$\alpha$  properly governs  $\beta$  iff  $\alpha$   $\theta$ -governs or antecedent-governs

$\beta$ .

Aoun et al. (1987)も、ECPを別の方法で分離しており、a統率の効果を「一般化束縛理論」から導き出し、語彙的統率をPFでの条件としている。また、

Rizzi(1987)は、E C Pの離接的条件を連接的条件とする見解を示している。

(i) a non-pronominal ec is

a) canonically head-governed, and

b) antecedent governed or  $\theta$ -governed

いずれの提案も、Chomsky(1987)同様、痕跡は、かつての「空範疇原理」の2つの条件を両方とも満たさねばならない主旨のことを意味している。

8) Rizzi(1987):fn.2.

“The fact that head government requires m-command and antecedent government requires c-command appears to be an irr[e]ducible difference between government and binding: government per se involves m-command, binding per se involves c-command, hence antecedent government, which s[i]multaneously involves government and binding, must refer to the more restrictive notion of c-command.”

9) 「受動構文」が[+human, -definite]の行為者を暗示するのは、下の例からも理解される。

(i) Haukuttiin. 「誰かが吠えた。」

barked-PASS

(ii) \*Pekka tapettiin auto-onnettomuudessa.

Pekka-N killed-PASS traffic-accident-INE

「ペッカは、交通事故で死んだ。」

普通、動詞haukku-「吠える」の行為者は動物であるが、(i)のように「受身」で表現された場合、これは必ず人間の行為者であると解釈される。さらに、(ii)のように特定の行為者を暗示する表現(下線部)とも共起しない。

受身形の起源については、小泉(1971)によれば、フィン・ウゴル諸語で受身要素がまちまちであることから、ウラル祖語には一定の受身形が存在せず、各言語は、無人称能動形によって「受身」を表現してきたと推定されている。例えば、フィンランド語の受身形は、(iii)のように形成された。

(iii) a. verb stem + causative + tense + agent

b. \*saa- $\delta$ a-k-sen > saa-da-han > saadaan 'get-PASS'

(Cf. エストニア語 saadakse )

「使役要素 $\delta$ aと3人称単数形senの行為者は、ある未知の力が使役的に働いているという意味で、受身の主語が行為を受けたと解釈していたのではないだろうか。」 [小泉(1971)]

この解釈によれば、自動詞が受身形になること(35)や不定の行為者が暗示されること、小泉(1971)が「主語」とよぶものが統語的に目的語であること(36)~(38)などが説明される。

10) 「分詞構文」について (cf. Ikola(1978), Timberlake(1975), 岸田(1988))。

- (i) Huomasin [junan saapuvan].  
noticed-1S train-G arrive-現分

「私は、列車が到着するのに気付いた。」

例(i)の構文は「分詞構文」と呼ばれ、用法的にはettä節を動詞の分詞形を用いて書き換えた、書き言葉的な表現である。

- (i') Huomasin, että juna saapuu.  
that train-N arrives

しかし、että節を下位範疇化する全ての動詞が分詞構文も補部に選択できるわけではないため、その情報は辞書に記載されなければならない。意味的には、以下の動詞がこの構文を取ることができる。

- a. 自動詞：「知覚」を表現する動詞  
näkyä, näyttää「見える」、kuulua「聞こえる」、tuntua「感じる」など  
b. 他動詞：「伝達」「思考」「認知」を表す動詞  
ajatella「思う」、arvata「推察する」、haluta「望む」、huomata「気付く」、sanoa「言う」、tietää「知っている」など

11) Stowell(1981):146.

#### The Case-Resistance Principle

Case may not be assigned to a category bearing a Case-assigning feature.

12) Jaworska(1986)は、PPも格を必要とする場合があることを論じている。

- (i) a. Between six and seven suits her fine.  
b. Between six and seven seems to suit her fine.  
(ii) a. The new tenants are reclaiming behind the garage.  
b. Behind the garage is being reclaimed by the new tenants.

統語的には、下線部のPPは格標示されている。特に、(ib),(iib)では、問題のPPが、まさにNPならば、主節の主語の位置に移動するのと同じ理由、すなわち、格を得るために移動している。さらに、このような現象が英語に限られているわけではないとして、ポーランド語からの例があげられている。

- (iii) a. Po obiedzie pasowało wszystkim.  
after dinner suited everybody  
b. Po obiedzie wydawało się pasować wszystkim.  
after dinner seemed PRT suit everybody  
(iv) a. Matka zajęła przy oknie dla dziecka.  
mother reserved by window for child  
b. Przy oknie było azjete dla dziecka.  
by window was reserved for child

13) これは、記述的には、「主要部移動制約(Head Movement Constraint)」“主要



部は、最も近い主要部の位置にのみ移動することができる”により、説明的には、ECPにより説明される(cf. Chomsky(1988b))。

- (i) \*<sub>CP</sub>[<sub>C</sub>·matkustako<sub>i</sub> [<sub>UP</sub>·pro [<sub>UP</sub>ette [<sub>UP</sub>t<sub>i</sub>...  
travel-KO NEG

障壁VPにより、ECPが満たされない。

- 14) フィンランド語では、補文標識ettäを省略することができない。ゆえに、(77b)の文の意味を言い表すためには、「分詞構文」を使用する。

- (i) Kenen luulet tavanneen Pekan?  
who-G meet-能過分

- 15) Chomsky(1988b)の見解によれば、PFにおける適格な音韻要素が限られているように、LFにおいてもその適格要素というものが限られている。また、それらは、すべて、連鎖の形式を持つ。

- (i) ( $a_1, \dots, a_n$ )

(ii)の要素のみが、LFにおいて認められる要素であり、Affect  $\alpha$ は、不適格な対象物がある場合のみ、適格要素を生み出す目的で適用される。また、「最少努力(Least Effort)」の原則により、“削除してもよい・削除する必要はない”は、“削除しなければならない・削除してはならない”と解釈する必要がある。

- (ii) LFにおける適格要素

1. 項	連鎖の条件に従い、 $a_1$ が格標示、 $a_n$ が $\theta$ 標示される、各々の要素がA位置にある連鎖の中に存在する
2. 付加詞	各々の要素が非A位置にある連鎖の中に存在する
3. 語彙的要素	各々の要素が $X^0$ 位置にある連鎖の中に存在する
4. 述語	述語上昇移動やVP移動などの述語連鎖
5. 演算子-変項	演算子 $X_1$ が非A位置にあり、変項 $X_2$ がA位置にある( $X_1, X_2$ )からなる2要素連鎖

「項」と「付加詞」の非A移動の際に見られる中間痕跡の削除の可能性の違いは、LFにおける適格要素生成の必要性に基づき、決定される。

- (iii)項の移動：Aから非Aへ

(非 $A_1, \dots$ , 非 $A_{n-1}, A_n$ ) ← (不適格な) 混成連鎖  

  
付加詞          演-変項

⇒非 $A_2$ から非 $A_{n-1}$ 、つまり中間痕跡を削除

= (非 $A_1, A_n$ ) ← 演算子-変項

- (iv)付加詞の移動：非Aから非Aへ

(非 $A_1, \dots$ , 非 $A_n$ ) ← 適格な付加詞連鎖

⇒「最少努力」により、中間痕跡は、削除不可

16) Epstein(1987)の基本的な考えでは、「項」と「付加詞」の痕跡が各々、異なった表示レベルで $\gamma$ マークされるのは、前者がS構造で指標を持つのに対し、後者がS構造では、指標を持た(ないか、存在せ)ず、LFにおいて初めて指標を与えられるからである。この両者の違いから、 $\gamma$ マーキングの適用時期が異なるという(Epstein(前掲)によれば、表面的な)記述が導かれる。

17) Chomsky(1987)の京都外国語大学でのセミナーでは、string vacuousな移動としない限り、WH移動のIPへの付加が許される可能性も示唆されたと、加藤・内田(1987)にはある(fn.7)。フィンランド語の話し言葉が、その可能性を明示的に提供してくれるかも知れない(cf. Hakulinen(1977))。

(i) Mies kummasteli, että mitä siellä oikein oli tekeillä.  
man-N wondered that what-P there really was in=the=making  
「一体、そこで何がなされているのかと、男は、不思議に思った。」

(ii) Jo alkaa katsoa, että tunteeko hänet.  
already begins to=look that knows-KO she-A  
「彼は、自分が彼女を知っているかを、すでにうかがい始めている。」

しかし、(ii)のように、X<sup>0</sup>要素がXP要素に付加していることになる例文が存在することから、問題の構造が、VP\*(=IP)付加によるものかどうかは、さらに考察を必要とし、また、統率者がX<sup>0</sup>要素に限定されている(本文(26))ことも考慮すると、ettäがVP\*(=IP)ではなく、CPを補部として持っているという可能性も否定できない(cf. Radford(1988):602)。

18) 「主題化」という名称で問題の非A移動を一括したが、その意味解釈は決して一様ではない(cf. Heringer & Wolontis(1972), Karttunen(1975), Hoover(1984)他)。基底構造の意味にプラス $\alpha$ の解釈が加えられるという事実は、付加という統語構造により表示されるが、その詳細(統語構造がどの程度まで「共通の」意味を付け加えると解されるのか；プラス $\alpha$ の意味は、どの意味レベルでのものか、など)については、検討を要する。

19) (87a)が完全には容認可能でない理由は、今のところ明らかではない。目的語が分格(内在格)であることから、Chomsky(1986a)の「一様性の条件」(本文(30))と関係するかもしれない。

20) Chomsky(1986a):85.

Either its[variable] range must be determined by its operator, or its value must be determined by an antecedent that binds it.

#### 参考文献

- Aoun, J., N. Hornstein, D. Lightfoot, and A. Weinberg (1987) "Two Types of Locality," *Linguistic Inquiry* 18, 537-577.  
Baltin, M. (1982) "A Landing Site Theory of Movement Rules," *Linguistic*

- Inquiry 13, 1-38.
- Breckenridge, J. and A. Hakulinen (1976) "Cycle and After," In Papers from the Parasession on Diachronic Syntax (Steever, S. B., C. A. Walker and S. S. Mufwene, eds.), 50-68. Chicago:Chicago Linguistic Society.
- Chomsky, N. (1981) Lectures on Government and Binding. Dordrecht:Foris Publications.
- \_\_\_\_\_ (1982) Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding. Cambridge, Mass.:MIT Press.
- \_\_\_\_\_ (1986a) Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use. New York:Praeger.
- \_\_\_\_\_ (1986b) Barriers. Cambridge, Mass.:MIT Press.
- \_\_\_\_\_ (1987) "Kyoto Lectures," January 28, 1987.
- \_\_\_\_\_ (1988a) Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- \_\_\_\_\_ (1988b) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," ms, MIT.
- Comrie, B. (1975) "The Antiergative: Finland's Answer to Basque," Papers from the Eleventh Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, 112-121.
- Davis, L. J. (1987) "Remarks on Government and Proper Government," Linguistic Inquiry 18, 311-321.
- Endo, F. (1986) "Case-marking Patterns in Existential Sentences and Split Ergativity in Finnish," Descriptive and Applied Linguistics 19, 13-24. Tokyo:International Christian University Press.
- Epstein, S. D. (1987) Empty Categories and Their Antecedents. Ph.D. dissertation, The University of Connecticut.
- Franks, S. and R. House (1982) "Genitive Themes in Russian," Papers from the Eighteenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, 140-155.
- 藤田耕司 (1988) 「局所性の統一から下位システムの統一へーその準備的一考察ー」『英米文学』第36号, 97-123. 大阪:大阪府立大学英米文学研究会.
- Fukui, N. (1986) "LF Extractions and the Nature of Antecedent-government," In University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics, Oriental Linguistics vol.11 (Hasegawa, N. and Y. Kitagawa, eds.), 37-78. Amherst:University of Massachusetts.
- Hakulinen, A. (1977) "On Embedded Questions in Finnish," In Studies in Finno-Ugric Linguistics: In Honor of Alo Raun (Sinor, D., ed.), 85-100.

- Bloomington:Indiana University Publications.
- Hakulinen, A. and F. Karlsson (1979) Nykysuomen Lauseoppia [Modern Finnish Syntax]. Jyväskylä:Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Heringer, J. and M. Wolontis (1972) "Focus in Finnish," Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, 152-161.
- Hoover, A. (1984) "Pragmatic Constraints of Case and Word Order in Finnish: Implications on Definiteness," Papers from the Twentieth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, 192-202.
- Ikola, O. (1978) Lauseenvastikeoppia [A Study of Clause-substitutions]. Helsinki:Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Jaworska, E. (1986) "Prepositional Phrases as Subjects and Objects," Journal of Linguistics 22, 355-374.
- Karttunen, F. (1975) "Functional Constraints in Finnish Syntax," In Papers from the Parasession on Functionalism (Grossman, R. E., L. J. San and T. J. Vance, eds.), 232-243. Chicago:Chicago Linguistic Society.
- Karttunen, L. and M. Kay (1985) "Parsing in a free word order language," In Natural language parsing (Dowty, D. R., L. Karttunen and A. M. Zwicky, eds.), 279-306. New York:Academic Press.
- 加藤泰彦・内田平 (1987) 「原則と媒介変項の理論」 太田朗・Félix Lobo編『海外言語学情報』第4号, 42-61. 東京:大修館書店.
- 岸田泰浩 (1988) 「フィンランド語における主格の分布について」 京都大学修士論文.
- 小泉 保 (1961) "A Study of Finno-Ugric Passive Voice," 『言語研究』60, 1-16. 東京:日本言語学会.
- Lasnik, H. and M. Saito (1984) "On the Nature of Proper Government," Linguistic Inquiry 15, 235-290.
- \_\_\_\_\_ (forthcoming) Move-alpha: Conditions on its Application and Output. Cambridge, Mass.:MIT Press.
- Marcantonio, A. (1988) "On the Case of the Object in Finnish: A Typological, Diachronic and Comparative Analysis," Finnisch-Ugrische Forschungen 48, 129-170.
- 松村一登 (1985) 「フィンランド語の構造」 『アジア・アフリカ文法研究』14, 17-40. 東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 中島平三 (1987) 「Barrier理論の新展望 (1)(2)」 『英語青年』5、6月号, 13-15. 東京:研究社.
- Nevis, J. A. (1988) Finnish Particle Clitics and General Clitic Theory. New York:Garland Publishing.

- Ostman, J.-O. (1981) "The Finnish 'Passive' and Relational Grammar," Papers from the Seventeenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, 286-294.
- Radford, A. (1988) Transformational Grammar: A First Course. Cambridge: Cambridge University Press.
- Reuland, E. J. (1983) "Governing -ing," Linguistic Inquiry 14, 101-136.
- Rizzi, L. (1987) "Relativized Minimality," ms., Université de Genève.
- Sadowski, A. M. (1983) "Der Finnische Partitiv," Finnisch-Ugrische Mitteilungen 7, 71-94.
- Safir, K. (1985) Syntactic Chains. Cambridge: Cambridge University Press.
- Saito, M. (1987) "Three Notes on Syntactic Movement in Japanese," In Issues in Japanese Linguistics (Imai, T. and M. Saito, eds.), 301-350. Dordrecht: Foris Publications.
- 佐久間淳一 (1987) 「フィンランド語における主語・目的語について」 『東京大学言語学論集' 87』, 127-51. 東京: 東京大学文学部言語学研究室.
- Stowell, T. (1981) Origins of Phrase Structure. Ph.D. dissertation, MIT.
- Taraldsen, T. (1985) "On the Distribution of Nominative Objects in Finnish," In Features and Projections (Muysken, P. and H. van Riemsdijk, eds.), 139-161. Dordrecht: Foris Publications.
- Timberlake, A. (1975) "The nominative object in Finnish," Lingua 35, 201-97.
- 外池滋生 (1988) 「日英語比較統語論 <上> <下>」 『言語』 5月号, 82-88, 6月号, 79-84. 東京: 大修館書店.
- Vainikka, A. (1987) "Case and Verbal Agreement as Argument Numbering," ms., University of Massachusetts.
- Webelhuth, G. (1986) "Some Data on the Verb-Object Relation in German," Linguistic Inquiry 17, 772-776.
- Whitman, J. (1987) "Configurationality Parameters," In Issues in Japanese Linguistics (Imai, T. and M. Saito, eds.), 351-374. Dordrecht: Foris Publications.
- Williams, E. (1980) "Predication," Linguistic Inquiry 11, 208-238.
- \_\_\_\_\_ (1984) "Grammatical Relations," Linguistic Inquiry 15, 639-674.

(きしだ やすひろ、博士後期課程)